マザー・マリア（未完）

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マザー・マリア（未完）

【Ｎコード】
Ｎ３９８２Ｑ

【作者名】
朋次郎

【あらすじ】
◎マザー・マリアも、仮題です◎

第1話・私は規関麻利亜と申します。

私はマザー・マリアと言われています。聖母マリアとも。
規関麻利亜のマリアという名前からきているのかもしれません。

私の仕事は人体工場のベビー部門と言うところでしょう。ひらたくいえばここは臓器工場なのです。
私はこの仕事全般を知っているわけではありませんが部分的にはよく知っています。
またベビー達のかわいらしさと無垢さは誰よりもよく知っています。マザーですから。
ここで生まれた赤ちゃんは産みの親からすぐに引き離されます。情がうつらないように。母親の気がかわらないうちに。出産後赤ちゃんの顔もみないうちにこちらへ連れてこられます。もちろん母親は納得の上です。精子バンクで授精して子宮内で１０か月の赤ちゃんを育てて売ったのですもの。
今の医学では受精後のマッチングで多分この臓器は使える、という赤ちゃんを創りだすことができます。でもね、神は偉大です。
人間の手で無から人間を創ることはできないのです。妊娠期間もかっきり４０週、１０か月。これも長くも短くもできないのです。ちゃんと１０ヶ月間、待たないと赤ちゃんは生まれ出てこない。
ああ、神は愛なり。偉大なり。

そして生まれたてのベビーはいろいろな念入りなチェックの後、私のところにきます。預かる期間は早くて３日。通常は２，３カ月預かります。場合によっては何年も。赤ちゃんや幼い子供の場合いざ使用する段階になるまで世話する人間が必要です。それが私の仕事。
ええ、天職だと思っています。本当は保育士というのでしょうが、

この部屋にくる誰もがマザーもしくはマリアと呼んでくれます。

私があずかっている子供は今の現時点で１２名です。１２名、２４時間体制、私が１人でみています。

ここは秘密の場所で秘密を絶対に洩らさない人間しかいません。私もそうです。私はもちろん洩らせる立場にないです。

この子たちは私の子です。この子たちにとって私ひとりが母親です。１２名のうち７名が生後１歳未満です。１歳未満が一番入れ替わりが激しいでしょう。マッチングの相手が死んだりして・・ということはこっちが生き残るというわけ。産みの親はそういうことは知りません。

ベビーがどういう目的で使われるか何のために産んだのかが明白なのでトラブルは全くありません。偶然とはいえ生き延びたとしても母親のもとに返すことはありえません。

そういった事情の子はここにずっといます。相手が見つかるまで・・・。残りが１歳代が３名、２歳児が１名、３歳児はなし。最年長が４歳です。４歳の子はずっとマッチングの相手がおらずこの部屋で生きています。

子供はこちらも情はうつらないように番号で呼ぶことになってはいますがこの４歳の子だけは特に許しをえて「ヨハネ」と呼んでいます。名付け親はこの私。聖ヨハネです。黙示録にも出てきますね。もう立派に私の手伝いができて赤ちゃんの世話をしてくれます。

ヨハネは男の子です。もう私の言葉が理解でき、自分の考えを言ってくれます。とても賢い子供です。もし許してもらえるならば番号のほかにマッチングの対象からはずしてくれたら、と思います。そうするといつ連れて行かれるかという心配がなくなるから・・・。

え・・・、これだけ言ってもまだわかりにくいですか？すみません、私もあまりわからないこともあります。わかっていることだけを教えますね。ここは臓器工場です。医学が進んで寿命が延びた今、

いかに延命できるかを各国で競い合っています。そこで必要なのは生まれたばかりの無垢な臓器です。

人間の身体には捨てるものはまったくありません。皮膚、心臓、肺臓、大腸、小腸、脳、眼球、角膜、神経、骨・・・

細胞による幹細胞、ＩＰＳ細胞の研究もすすんではいますがまだまだわかっていないこともあります。遺伝子分野もバッドミラクルと言う病気のせいで急速に研究がおとろえてきています。そう、あのバッドミラクルは世界に衝撃を与えました。実は私もバッドミラクルにかかりました。後遺症は今もなおあります。きっとなおらないでしょう。

これは私が小さい頃の話です。でも私の祖父、関季目が医師でかつ政府の一員でもありバッドミラクル究明の一部にかかわっていたので皮肉ですが私がここに詰めるきっかけにもなりました。この話はまた後でゆっくりします。

万能細胞といわれたＥＳ細胞と遺伝子操作の進化は医学の進化でもありました。ですが同時に人類滅亡の危険もはらんでいたのです。みんなが薄々と感じながらも利用していたらこの様です。あれだけのことがおこりあれが原因で戦争もおこりましたがでもまだ研究は細々と続けられているのです。遺伝子分野の研究成果と人類の延命はこれは人類にとっては最強のツールです。

もはや神の領域と言う言葉はなくなったのも同然です。

私は幼いころに聞きかじった聖書の言葉を唱えます。

ああ、神は愛なり、偉大なり。

人類の悲願の不老不死、先に延命。これは古風と言われようとも、やはりオーソドックスな臓器移植がメインになっています。豚のや牛などの哺乳類の臓器から人間へ生体移植。この段階はもう過去のもの。今は受精の段階から推測される遺伝子を確立すべく卵子と精子をかけあわせる。そしてできた受精卵を志願者の子宮に入れる。そうしてできた子供がここに連れてこられるのです。こういう私のいる施設が他にもあるとはうすうすわかりますが、でもあの大事故

後に反対派もいる今、おおっぴらにこの施設の存在を誰にでも公開できるわけではないことをわかってください。

さてこのマザーの部屋はたった1つだけです。大きなドーム型になっていて私はいつもこの中央にいます。ベビーや子供たちと私はここで寝て起きて暮らします。外へ出ることは決してありません。

ここにあるのは20ぐらいの小さなベッドそして部屋の中央にあるのはそう、私のベッド。ベビーの小さなベッドにははしからNO1、NO2とつけられています。個体識別番号はまた別ですが私には関係ありません。いつでも赤ちゃんが泣くと反射的に起き上がり抱っこしてあやします。泣き声でおむつが濡れたのか、抱っこか、お腹がすいたのかがわかります。

その間もしヨハネが起きていたらミルクをつくってもってきてくれます。

実は私は目が見えません。かろうじて明かりがうすぼんやりと分かるぐらいです。ここには窓がありません。いつも薄暗いようです。ヨハネやベビーそして私には明かりは必要ないのです。だってここは私以外はいずれ誰かの臓器になるベビーしかいませんので。電話も何もありません。万一に備えて外部に伝わるベルの場所は把握していますが使用したことは一度もありません。本もTVもありません。私には必要ないし、ベビーも必要ありません。ヨハネにはかわいそうな環境かもしれませんが、でもヨハネだって普通の親のある子供のように学校へ行ったり遊園地に連れていくような環境になれるとは思わないしそういう存在もあることも知らないでしょう。友達もいないし、そもそも友達の存在もなにもしらないでしょう。

でもマザーたる私とヨハネは真の家族であり友達でありまた恋人でもあったかもしれません。

私には視覚はありませんがその代わりよく聞こえます。またヨハネの顔形も手指で触ってしっています。私はヨハネが生まれて間も

ないときからヨハネを育てました。
マザーですから。そしてかけがえのない私の子供達。ほぎゃあ、ほぎゃあと泣く私の赤ちゃんたち！
来たかとおもうとすぐにお迎えが来る子もいればそのままヨハネのように４年もいる子もいる。みんな私の大事な子供達。
もうこの仕事をして１０年位にもなりますか、ずいぶんと多くの赤ちゃんがここを通過というか、巣立ちました。無駄死になった赤ちゃんはないと思いますよ。全部綺麗に使われたと思いますよ。
誰かの役に立つために生まれさせられた赤ちゃんたち。牛や豚と変わりない。彼らは食べられるために生まれさせられる。ここの赤ちゃんは臓器を取られるために生まれさせられる。まだ人格がないだけ多分何もわからないうちに麻酔をかけられて臓器を取られる。ただ死ぬだけではなく他人の命を延ばすため。
一度は死んでそして他人の身体の中で有意義に生き返る赤ちゃんたち。

だから私の仕事は悲しくともむなしくとも、そう何ともないのです。そして誇りをもって仕事をしています。

第2話・私の仕事

ここでの1日の流れを説明しますね。生まれたての赤ちゃんはいつもすやすや眠っています。本当に小さな小さな生命です。

私の両手に少し余るぐらいの赤ちゃんが小さなガーゼにくるまれてやってきます。右のドアはその時にだけ開くドアです。赤ちゃんは大体時間通り、産む時間も医師の都合で決められるようなので私のところにくる時間も決まっています。こちらに事前の知らせはありません。

そして赤ちゃんを連れてくる人間はたいていノジマと言われているやや若い男性の医師です。それでなければ年配の女性の医師。この人はいつもしゃがれた声をしています。

「さあ、マリア。番号２０２０ＷＡ－１だ、この子の受け取りは明後日だ。それまで預かってくれ」

私は復唱します。「はい、番号２０２０ＷＡ－１、ですね、じゃあ、この子は３日間だけですね」

「そうだ。アプガースコアは１０、健康そのものだから」

「この子も相手が決まっていますね」

どうかするとノジマは饒舌でこちらが聞いてもいないことをしゃべることがあります。

「うん、ドナーになるのは3日後だ。先さまは待ちかねているのでな。移植先は3人だ。心臓と肺臓の人、それと大腸の一部。腸間膜と髄液。残りは研究用とかな。まあそれまで頼む」

「わかりました」

私はほとんど見えない目でにっこりとします。そして温かい小さな命をノジマから預かります。ベビーの足にはめられているわっかの文字を指でなぞり２０２０ＷＡ－１と刻印しているのを確認します。３日間ならばこのまま２０２０と呼ぶことにします。

通常というか1カ月ぐらいならベッド番号です。２０２０ＷＡ－

1という赤ちゃんはわたしのすぐ隣のベッドを開けて（そこにいた3か月の女の子はヨハネの隣にします）私は新しくきた赤ちゃんに祝福のキスをします。ベビーの額にはいつも希望と幸福の味がします。でもこの子の将来はただ1つと決まっています。

「２０２０ちゃん！よく来てくれましたね！私はマザーよ。短い期間だけど、２０２０ちゃん！よろしくね」

　すると２０２０は小さな手で私の顔をつつきます。そして私の胸を本能的に

お乳を吸おうとして顔をぐいぐいと胸の方に向けるのがわかります。

「ああ、なんてかわいい、いい子なの！」

　ヨハネもこちらへ来てどれどれ、と顔をのぞかせます。にっこりします。（見えなくても表情がわかりますよ！）

「かわいい赤ちゃんだね！長くいられるといいけど」

「そうね」

　ノジマは続けて「何か変わったことはないかね、誰かが熱をだすとか」

「いいえ、何もありません」

「ミルクの飲みが悪い子等はないね」

「ええ、何ともありません」

「じゃあ、使える子ばかりだな、よかった」

「はい」

　そしてノジマは帰ります。帰る前に「ここはにぎやかでいいなあ、赤ちゃんの泣き声で満ちる部屋っていいなあ、私はここが大好きだよ」とよく言います。そういうノジマの表情は私には見えません。だけど心からくつろいでいる物言いで私もうれしくなります。

　私はここから出たことはないのでノジマがどこへ帰るのかは知りません。ノジマは無駄口をたたいても外の様子は絶対に私に教えないし私も聞きません。仕事も愚痴もなにもかも言いませんし、また私も言いません。私もノジマも仲間です。そしてもう一人日常的に私に接する人間がいます。

それは食事の配達兼掃除をしてくれる人です。名前はザアと言うそうですがそれはノジマから聞いただけです。この人は私と同じ女性ですが無口です。彼女は左のドアからやってきます。ザアは無駄口も挨拶もなにもなしでただ己の仕事を完了させるためだけにドアをノックもせずに時間がくると大きな2つのワゴン車を押してやってきます。

1つのワゴンには缶ミルクや離乳食、私やヨハネの食料品。そして滅菌ガーゼや滅菌した哺乳瓶やおむつ、テイッシュ等の消耗品。もう1つのワゴンは掃除用具や私達が出した汚れた衣類、おむつ、ごみなどを持っていけるようになっています。ザアは毎日やってきて毎日ここで1時間ほど黙々と仕事をしてまたドアを閉じてどこかへ帰って行きます。いつも決まった時間にミルクの缶や、私達の食糧、おむつ、こまごまとした日用品などを置いていき、トイレやごみ箱を綺麗にあけて掃除していってくれます。年頃は同じ年かなとも思いますが本当に彼女とはしゃべったことがありません。

一度ヨハネがマザーは目がみえないけど、あの人は耳が聞こえない、と言いました。ああ、それで何度か何かを手伝ってと頼んだ時も無視されていたのかと思っていました。彼女もまたバッドミラクルの病気にかかったのでしょう。

こんなことがありました。ザアがトイレ掃除をしているときに新しいおむつをとりだそうとワゴンをさわっていたら（指でおむつを感知しようとしたのです）突然突き飛ばされたことがありました。

ザアは何もいいませんでしたがこのときはヨハネがおむつをワゴンからさっと取り出しザアがよく見えるように振りかざしたようで、ザアはヨハネに持って言けという感じでうなづいたそうです。ザアは単に聞こえないだけだったのです。彼女の容貌や表情はわかりません。ただかなり太った人ではないかと思います。ある時光を背にした時におぼろげですが姿が見えましたので。ただ容貌まではわかりません。バッドミラクルにかかったせいでかなり私は不自由な思

いをしてはいますがでも生きているだけありがたいと思います。いつの日か神の御前にまみえるときまでは、この世界を生きていかねばなりません。自分に正直に、そして与えられた限られた生をもつかわいそうな、でも、もしかしたら、幸せかもしれない赤ちゃんをお世話するという使命を全うせねばなりません。ザアやノジマはわかりませんがでも彼らだって自分の仕事に忠実で毎日仕事をしています。人間はそれでいいのではないでしょうか。

でもザアが赤ちゃんがどんなに泣いても幼いよちよち歩きのベビーがよっていってもあやしもしない、声もかけないのはここの施設の意向かもしれないとも思います。だって私、マザーもこの部屋ではマザーとして存在していますが外から出たこともありませんし、外へ出てはいけないのです。ザアの態度で仕事の手伝いはお互い無用とわかりました。以降彼女ともかかわりがありません。ただ時間通りに毎日1回はきっちり来るので彼女の来訪もまた1日の刻みの1つとして重要な人物なのです。

食料品は5カ月未満のベビーはミルク、それ以降は人数にあわせて離乳食やジュースの缶がきます。ザアのもう1つのワゴンからそれらはおろされていきます。私の食料も缶づめと袋詰めのパンがきます。もちろんボトルにはいった水も。それらもザアのワゴンにのってきます。食べ物はおいしくともまずくとも何ともありません。私達にはあれが食べたいとかいう権利はないです。ただ配られるだけ。配られたものを食べるだけ。

ヨハネもおいしい珍しいものを食べたいという欲求もありません。味を知らないから。私は幼いころは目が見えていたしもちろん、外の世界にいたのここでは珍しいもの、おうどんとかおそば・・熱くておいしい長いずるずるのもの、ピザとか熱くておいしいチーズがひきづるもの、ケーキとか冷たくておいしいレアチーズケーキとか、アツアツのアップルパイ。

当時は両親も祖父母も存命だったので大層めぐまれた食生活でした。でもそんなことここでいってもしょうがありません。おいしいものの味をヨハネに口で教えてもしかたありません。だからヨハネも何も知らないのです。こういうことは教えるだけ無駄で外にあこがれるようになっても私は何もしてあげられないしそんなことを言えば確実に行き先がなくとも研究材料にされるだけ。いけないことです。

この部屋は鍵もなく、外からでしか開けられないようになっています。私はそれを不満に思ったりもしないし、外へ出たいとも思いません。ベビー達のつかの間のマザーとしてここにいるのが本当に幸せです。

さてベビーが引き取られる時の話もしましょうね。３日後ノジマはきちんとやってきましたよ。

「２０２０ＷＡ－１予定通りに使用するので引き取りにきたよ」

こういうときのノジマは決して無駄口をききません。マザーたる私も事務的にベビーをノジマに渡します。

「この子は夜泣きもせずとってもいい子でしたよ」

ノジマは多分うなづくのでしょう。そっと私からベビーを受け取るとベビーの足元をさぐり、足元のわっかで番号を確認しているようです。小さなベビーを入れるワゴンに入れてそしてどこかへ連れて行きます。ヨハネはいつもそういう時はよちよち歩きの他の幼児の相手もせずまたミルクをやりもせず、じっと私の横に立って見送ります。

マザーの私もノジマの足音とベビーを入れた小さなワゴン車がたてるかすかなカラカラという音が
聞こえなくなるまで見送るのです・・・。さみしいとかそういう感傷はありません。あっても意識しないようにしています。だってそんなもの持っていたってしかたありませんもの。ただ胸の中で小さ

く十字をきって２０２０の赤ちゃんがいよいよの時にちゃんと麻酔が効いて苦しんだりしないように、神のご加護を祈ります。アーメン。

そして部屋をまわり泣いている子のベッドへ声を頼りに歩いていきます。おむつを変えます。抱っこします。そして抱っこの後には必ず頬ずりとキスを。眠ってしまった子にはそっと小さな布団を整えてやります。全部私は手探りですがちゃんと的確にやれます。

最初のうちは施設側にも私は目が見えないということで当然信用もなく、私はここに2，3人いた看護師の手伝いでした。彼女達はあまりいい感情をもってくれないようで私につらくあたりました。「どういう伝手であなたみたいな視力のない人を雇ったのだかわからない」と

よくいわれました。でもわからなかったのは彼女達の方です。いつしか私がマザーといわれこの大事な生命の部屋を一人でまかされるにいたったのですから。

第3話・私の幼かった頃の話

今日は外の世界、私が6歳ごろまでいたころの昔話をしましょうね。でないとこの世界の始まりと行く末がわからないと思いますので。どうか退屈しないで聞いてくださいね・・。

幼い私は私の祖父母と両親と生まれたばかりの弟と一緒に暮らしていました。祖父は医師でした。私の両親は2人とも牧師でした。祖父母も両親もまた敬虔なキリスト教信者です。両親や祖父が外で働いているときは幼い私は祖母と一緒に過ごしていました。弟が1人いました。目がくりくりとしたとてもかわいい赤ちゃんでした。ハイハイしていてボールで一緒に遊んでいたことをよく覚えています。もちろん当時は私は目が見えています。

私の弟。生まれたときはどんなにか私は嬉しかったか。ある一時、両親がどこかにいって夜になっても帰ってこない。母は、いえお母さんはお腹が大きくなって破裂しないかびっくりするくらいです。だから私は心配していました。でもおじいちゃんとおばあちゃんは大丈夫だよ、と平気な顔をしています。
それから帰ってくるの、楽しみだねえと顔を見合わせて笑うのです。私はその意味がわかりませんでした。
そして1週間後ぐらいにやっと帰ってきたかと思うと母が誇らしげにそして大事そうに小さな赤ちゃんを見せてくれました。それが私の弟。名前は留津。幼い私はとてもびっくりしました。そしてこわごわと留津を見たのを覚えています。赤ちゃんのぷっくりしたほっぺたとむっちりした手足、愛くるしい笑顔に頭の産毛、ええ、ええ。全部覚えていますとも。
だからこそ今の職業が天職と考えるのもこの弟、留津と一緒に遊んだ体験がものをいっていると思います。こういう体験を持つ人も

今では少なくなっているのではないでしょうか。赤ちゃんを産む人も少なくなり赤ちゃんと接することのできる人自体もめずらしい世の中とあれば。・・・私は残念に思います。

あの頃は気付かなかったけれどあの頃の日常の色彩を私はこの年になっても全部覚えていて全部思い出せます。赤、黒、黄、水、青、紫、ピンク、灰。みんな私の好きな色です。みんな私の大事な色です。ああ、幼いころのこの世界は何と美しい色彩で満ちていることか！

そして今は亡き両親、祖父母、一緒にすんでいた教会、大勢のお客様達。大事にしてた私のクマちゃん、お人形さん、おばあちゃんが大事にしていたお皿のセットの模様まで本当によく覚えています。空で言えるぐらいです。ああ、なんと懐かしくて美しい景色の連続だったでしょうか。

部屋には窓がありました。窓からは景色が見えました。山や空がありました。空には鳥が山には緑がありました。庭には四季折々の花が咲きました。2階のバルコニーの小さな家庭菜園でトマトやきゅうりを取ったことも覚えています。

小さな蝶、虫、ツル、花のにおい、葉っぱのにおい、肥えのにおい。風のにおいに雨のにおい。お母さんの焼く卵焼きやみそ汁のにおい。全部覚えています。またそういうのが当たり前だと思っていました。でも今は当たり前ではないのが当たり前です。幼いころのその思い出は今の私の大事な財産です。お金には変えられない私の形のない財産です。

私が6歳になった頃、世界がめまぐるしく変化しはじめました。もともとおばあちゃんが小さいころから世の中が便利になっていたそうです。

おばあちゃんの小さかった頃、なんて大昔ですよね。すでに世の中が便利になりなんでもコンピューターで世の中が動いていたそう

です。また人間の健康管理や病気すらコンピューターで管理できるようになっていたそうです。もっと大昔はもう治すことのできなかった病気もなんでも治せるようになったそうです。

かぜや怪我、目の病気、鼻や器官の病気、胃腸の病気はてはとても治らないだろうと思われていた伝染病、悪性腫瘍すらも。なんでも遺伝子で管理できるようになり、病気の遺伝子もあらかじめなくすように食べ物にセットできて妊婦さんもそれを食べました。すると生まれながらに病気や障害をもつ赤ちゃんもほとんどいなくなったそうです。これはすごいことでした。

また食べ物を食べられなくする害虫もいなくなったそうです。だから昔よりもずっと少ない面積でもお米や野菜、果物がたくさん取れるようになりました。また味もぐっとよくなったそうです。牛や豚、鶏もほとんど病気をしなくなり、すぐに大きくなってお肉になり市場に出て私達の食卓にでます。とても便利な世の中でした。まあ、私は幼かったのでまるで自覚はありませんでしたが。

とにもかくにも便利な世の中だったようです。ただ牧師だった私の両親やその友人達はその状態はよくない、人間は神の領域に入るべきではない、いつか世が滅びるぞ、最後の審判がくるぞと心配していたようです。それで何度か集会やデモを行い警察や政治団体ににらまれていたようです。でも祖父が政府に属した医療機関に医師として勤務していたせいもあったのか、逮捕にいたるようなことはありませんでした。

我が家は教会でもあり礼拝時にもちろん来客は多かったです。そのうちの1人に黒井さんと言う男性がいました。黒井さんと私は仲良しでした。正確に言うと彼は祖父の同僚かつ年の離れた友人でしたが。

この人は祖父よりはずっと若く、祖父と同じ医師でした。近くにすんでいてかつ独身だったせいかよく夜勤明けに我が家にやってきて私達と一緒に朝ごはんを食べたものです。それから昼近くまで私

達の居間で寝ておられたのを覚えています。
黒井さんはよく自分のことを「厚かましいやろ、オレ」といっていました。確かに我が家に来ても何か食べているか寝ているかです。寝たいときはどこにでも寝る人で一度なんか私の布団の中で蓑虫みたいにくるまっていて驚いたこともありました。
でもたまに時間があるときは私達とよく遊んでくれて私にとっては大好きなお兄ちゃんというかんじでした。いつも小型のノートパソコンをもっていたのを覚えています。
おばあちゃんも黒井さんを気に入っていてもしうちの麻利亜が大きくなっても独身だったらお嫁さんにしてもらいなさい、といっていたくらいです。祖父と同じ仕事をしていたという以外に何かひとをひきつけるものがあったのだろうと思います。
黒井さんのややはにかんだようなやさしい笑顔はよく覚えています。夜勤明けと言うのは疲れるのかよく寝そべったまま私とままごとの人形遊びをしてくれました。そしてそのまま寝てしまうのです。幼い私は平気で黒井さんのすやすや寝ているお腹の上に人形やぬいぐるみを並べて遊んだりしました。

こう書いていると平和な状況のようにみえますが時勢はそうではなかったようです。当時でも貧富の差が今以上にあって暴動もあったようです。これに関して、私は小さかったせいもありよくは覚えていません。
祖父や両親がいないときは祖母はいつも私と一緒にいて、幼稚園の送迎やおやつ、幼稚園が休みのときは1日中私と一緒にいて掃除洗濯、買物、散歩、料理。すべて一緒でした。もちろん手伝えはしませんでしたが祖母のすることをよく見ていたようです。だってこの年でも祖母の仕草、何をしていたかなど覚えていますし、祖母の料理のあじつけも本当によく覚えています。料理は得意でしたがホットケーキなんかよく食べました。煮物やてんぷらも好物でした。
ああ、もう一度あの料理を味わえたら！でもそれはかないませんね。

ただ両親は自分の主義を貫くためにベジタリアンを通していたようです。さすがに子供には強要しませんでしたが、お肉を食べているとよく母は祖母にこの子にお肉はあまり食べさせないで。バルコニーで作っているお野菜をメインにして、と訴えていたのを覚えています。両親はお肉や魚が狭い養育場で育てられ成長剤を与えられている生き物がスーパーで並べられて売られ消費者の口に入る状況を危惧していました。生産者側は薬でもなんでも与えて早く子供を産ませて早く成長させて肉にして売らないと採算がとれないからでしょう。

当時からもう昔のように1年単位でお米を作ったり、牛や馬が自然に妊娠して子供を産むのを待ったり成熟するのを待ったりしなくなっていました。だが昔のやり方にこだわるにも当然限界はあります。

祖母は自分の子供である父親やまた嫁の母親の主義も理解していましたが、いまどきの時勢というものがある、農家でもない自分が作れるお野菜も限界があるし、野菜はすごく高く、お肉や魚よりもずっと高価な食品だ。家計もあっぱくする。ベジタリアンもいいが、この主張を貫きすぎるとスーパーで何も食べるものは買えないし、何にも食べられるものがないよと文句を言っていました。

ただ両親のいうことはまさに正しいことだったのかもしれないですが、また両親が思っているよりもずっと多くの人たちが世の中の便利すぎる世の中に危機感をだしていたようです。

口に出さないだけで。

でも口に出しても仕方ありません。私の両親はそれをしたのです。デモをしたりＨＰを立ち上げて警告をうながしたりしたようです。

ああ、あのまま私が大人になっていたらどうでしょうか。でも世の中はそうなりませんでした。

バッドミラクルです。

「バッドミラクル」

これはいきなり世の中を席巻しました。
バッドミラクル・・。コンピューターや賢い科学者たちにもわけがわからない奇病のことです。いや奇病というより突然の病気、いいえ病気とはいえないのかも。
それは最初は1、2例でごくわずかな数でした。だけどそれは見る間に増えてしまったのです。症状もいろいろでした。当時の騒ぎは幼い私もパソコンで見てそのニュースと画像を覚えています。また祖父が医師でかつ政府機関に属する人間だったので奇病の情報が入手しやすかったというのもありました。また黒井さんが折に触れて医学の知識に疎い祖母や幼い私にもよくわかるように説明してくれたのもあります。
その奇病と言うのは身体の機能がある日突然停止かつ壊死することでした。昔から心臓の突然の停止は心筋梗塞、脳の停止は脳梗塞。という場合によっては即死につながる病気がありますがそれは奇病ではありません。
ある日突然2本あるうちの腕が1本壊死する。ある日ある人は2本あるうちの足が1本壊死する。軽い人なら10本ある指のうち中指だけが壊死。でも全部の指が壊死した人もいます。こういう人はごく軽い人です。重い人なら肝臓の一部が壊死して苦しみながら亡くなったりしました。
これは伝染病でもありませんでした。そして予防策も対応のしようがない。また一度壊死した機能はもう元通りになりません。原因も不明です。この病名も最初は何もなかったのですがいつしか悪い意味での奇跡・・・。バッドミラクルという名前で定着しました。
そう、バッドミラクルです。大勢の人々が罹患してしまいました。大人も子供も年齢に関係なくある日突然身体の昨日の一部が動かないかマヒしてしまうのです。
どれだけの悲劇が家庭内で、職場内でおこったでしょうか。
栄えていた大都市の機能は完全にマヒしてしまいました。これは神の怒りとしかいいようがない、そういった医師の祖父。

祖父はいつも笑顔でした。家庭菜園で野菜や花の手入れをしている時の祖父の顔が一番好きでした。たいてい隣には祖母もいる。収穫の時には私の父母もそろい、小さな弟もいる。留津はいつも家族の誰かに抱っこされていました。家族全員がバルコニーの中で揃うと狭くてぎゅうぎゅう詰めです。そうやって取る野菜はどんなにおいしかったか。色とりどりの野菜や果物が食卓一杯にのせられ、大皿をみんなでつついていただく。

もうこういう幸せは存在しなくなりました。どの家庭もこわれてしまいました。

バッドミラクル・・壊死・・身体の機能がどこかこわれてしまうのは老若男女ほとんど全員がそうでした。

医師たる祖父も左足全部がある朝突然壊死しました。バッドミラクルにかかったのです。覚悟していたのか祖父は淡々と自分の動かなくなった足をすぐに切り落とし、義足をすぐに手配してできあがると次の日からリハビリです。1カ月もしないうちにいつものように出勤していきました。祖母は両手でした。祖母も覚悟していたのか祖父に動かない両手を切ってもらい次の日から口をつかって縫物をしたり料理するリハビリです。

父は脳髄がだめになったのでいきなり動かなくなってしまいました。母親は子宮です。すぐに切除したのでことなきを得ましたし、もう子供は産まないつもりだったのでこれですんでよかったと言っていたようです。

でもまだ小さな赤ん坊だった私の弟留津は心臓でした。昼寝したままの眠ったかわいいままで動かなくなってしまいました。母はいつまでも弟を抱いていつまでも泣いていました。昔からさっきまで元気そのものだった赤ちゃんが突然死するＳＩＤＳという病気はありましたが病院へ連れて行くと心臓が壊死しているのがわかりました。これもバッドミラクルだったのです。どこの国のどこの場所でもこういう光景でした。

命があればめっけもの。だけどいのちはあっても心のよりどころや大事な人をなくして自暴自棄になってしまった人もいます。交通機能も流通、教育、医療機関も全部マヒしました。世の中は元から乱れていましたが無秩序の危ない世界になりました。全部が健康な人はほとんどが存在しません。みな何かをなくしてしまった人です。世の中は全部昔で言う不具者ばかりです。

バッドミラクル・・悪の奇跡。原因不明の悪い奇跡。どうして身体が動かないのか、息ができないのか、ご飯が食べられなくなるのか。誰も答えが出せません。

とうとう私もまた・・バッドミラクルに罹患してしまいました。私はある日突然目が見えなくなりました。ご飯にかきたまごをかき混ぜようとしたときに突然黒いカーテンがシャッと下りてきたような感覚がしました。それきり何も見えません。私は視覚をなくしてしまったのです。私は叫びました。

「何も見えない！何も見えない！お母さーん、おばあちゃん！私は何も見えない」

赤ちゃんが死んでしまいお部屋で泣いてばかりいた私のママもすぐに私のそばに来て抱いてくれました。

「ああ、神様。この子までどうか連れていかないで！」

おばあちゃんも私のそばに来て私の手に頬ずりします。

「ああ、麻利亜、大丈夫、大丈夫だから！」

ママやおばあちゃんの悲痛な声は今でも耳に響きます。

「ああ、神様！この子まで連れて行かないで！」

第４話　バッド・ミラクル

私の眼、視力は完全になくなっていました。

でも子供の順能力とは大変なもので私は一時自分の目が見えなくなったことにパニックになりましたがそれ以外はどこも痛くもかゆくもありません。最初は視えないことに癇癪を起してたとえば赤い服を着た人形が見えないことに怒り、気に入りのチュニックに着替えたいのに場所がわからない、缶の中に入っている飴を手探りで取るけれど、好きなイチゴ味でないことに怒り・・・。赤ちゃんだった弟もやさしい父親も死んでしまったし。ええ、泣いて暴れましたとも。

でもね、私にはまだ母親と祖父母がいました。みんなにかわいがってもらえました。視力がなくなっても家族は普通に接しました。祖父は医師であったので何とかしてやりたいという気持ちがあったようです。どこからか何かわからない粉薬や錠剤を入手してきて私に飲ませたりもしました。でもあまり変わりませんでした。でも不思議なことに全くの暗闇から年数がたつにつれて光の方向などはわかるようになりました。祖父のもってきた薬、というかサプリメントのせいかどうかは不明ですが、祖父はそれをみて全然何もしなかったよりはいいかな、とつぶやいていました。

結局バッドミラクルは私の家族全員がかかったわけです。まず父が即死。弟も即死。祖父は足、祖母は腕、母は子宮。そして私は視覚。死んでしまったものはもうどうしようもありません。けれど残されたものは生きていかねばなりません。みなで力を会わせて生きていかねばなりません。

みんな信仰を持っていたのも大きかったと思います。すべては神の試練による、またすべては「挑戦」になる。なんでも「挑戦」してみよう。そしてできないことからできることを増やしてみよう、それを合言葉に私はがんばりました。

みんなの顔がみえなくてもさみしくなるとみんなに抱っこしてもらえたのも大きな励ましであり私の活力になりました。祖父の抱っこはひげの感触。祖母の抱っこは両腕がないので両肩のかぼそい少しだけ頼りない感触。母の抱っこは豊かな胸があたりふわふわでやさしい気持ちになる感触。これらはどれだけ大いなる恵みであったことか。私はこういう家庭に生まれ育ったことを感謝いたします。

またこれからも視力のない眼でもありますが、誰かの力や励ましになりたいと思うのです。

ですからこのマザーという仕事は私の天職です。

元の話に戻りますね。そしてできるだけ視力がなくても不自由しなくてもいいように、かつ自分でできることは手探りをしてでもするようにしつけられました。ですから服を脱ぎ着したり、ご飯を食べること、トイレに行くことに関しては自分で工夫して自分で何とかできるようになりました。遊ぶこともある程度は痛い眼にあいはしましたが、それも大事なことでした。ある程度の危険を察知して自分で判断して動いたりものをよけたりするのです。たとえば走ってきてものにぶつかって転んだり、はすぐに学習して良く知らない場所で走るのは危ない、とか聞きなれない音や車の音が聞こえたら立ち止れ、ということです。

さみしいこともありました。まずみんなの顔が見えません。お空の色もお星様も見えません。きれいなお花も大好きなお人形も見えません。朝起きると私はそっと手探りで布団の周りをなぞります。そして頭の方には着替える衣類、枕元にはお人形、があるはず。でも私は寝像が悪いので朝起きるとまず自分が今どこにいるのかを確認します。着替えてから手探りで立って、トイレに行きます。用をたすと手探りで洗面器に向かい顔を洗い、歯を磨きます。そして廊下の壁を伝って台所に行く。ここまで1人でできます。

それからみんなにおはようという。ここも一人でできます。こういう子もたくさんいたでしょう、幼稚園や学校はすでに無期限停止。

バッドミラクルが世間を席巻してからもう教育機関は存在しないのと一緒でした。もうありませんでしたので家庭でこういうことをしていた子も多いでしょう。

逆に親に見捨てられて悲惨な運命をたどった子も多かったでしょう。行政だってまともに機能していなかったし、何もできなかったと思いますよ。私は本当に幸運だったのです。視力だけですんでよかった。一緒に暮らしてくれる人がいてよかった・・・。本当によかった。

黒井さんはいつものように夜勤明けと称してご飯をたべにきたりしました。不思議なことに彼は全然身体に支障なく健康そのものでした。祖父は冗談交じりになぜ君は大丈夫なのか、何らかの免疫をもっているならぜひ提供してほしいといっていました。黒井さんは笑うだけでした。

確かに黒井さんのようにバッドミラクルに全然かからない人も少ないですがいたようです。年数がたつうちにその人たちの一部はヘンな選民意識と優越感をもっていくようになりますが・・。黒井さんはそんなことで威張ったりするような人ではありませんでした。私の家に遊びにくると力のいる仕事を手伝ったり、ときには夜勤明けで疲れているだろうに私の手遊びにつきあってくれたりもしました。

だけど黒井さんは突然、ぷっつりと消息を絶ちました。祖母は心配しましたが祖父は彼のことだから大丈夫だ、何かの考えがあったらしく突然辞表を出してどこかへ行くといったのだ。だから失踪ではない。黒井は見かけよりはずっと頑健でしっかりしているからある日ひょこりと帰ってくるよ、と言っていたのを覚えています。

黒井さんがいなくなって私はさみしかったです。私は黒井さんが大好きだったのです。小さな女の子だったけど、もしかしたら黒井さんと大きくなった私は結婚するかもと本気で思っていました。彼とはまったくそういう話はしなかったので私の想像でしかないです

けれど・・・。

そして私は１０歳になりました。世の中の状況はますます悪くなっていくばかりでした。目が見えないこと以外は私は大丈夫で外に出ることはなく家の中で平穏に過ごしていました。勉強は祖母が見てくれていました。ああ、子供の順能力はすごいです。目が見えないことに癇癪をおこしてもまたすぐに怒っても仕方がないことに理解するようになるのです。ママだって子宮をなくしたし、おばあちゃんは全部の指がなくなってのでいつも口で何かをする練習をしている。私をなでてくれるおばあちゃんはもういない。私が望めば両方の肩を狭むことで私をいつも抱いてくれます。そして顎で私の顔や頭をなでてくれます。

かわいい赤ちゃんだった弟をなくし、何らかの器官をなくしてもほぼ家族家庭の機能がこわれなく、いつも通りの暮らしにすぐ戻れたのはきっと信仰の力があったからではないでしょうか。

祖父だって家での様子しか知りませんが義足で不自由そうに歩いているのを私はこの耳で聞いて知っています。近所の子供だって直前まで足が壊死して切断などの処置が遅れてしまい、結局感染症や傷の化膿が元で亡くなった子もこの目でみていますし、何らかの臓器がなくなって急死した子もいます。

葬式なんかもう世の中めちゃくちゃで存在しません。これらのバッドミラクルと言う奇病は統一性というものがまるでありません。原因も皆目分からず原因を突き止める研究者すら奇病にかかり壊滅しかかっています。いや政府や警察すら壊滅しかかっていました。

結局は食物が全部悪いのではないかというわさが広がったようです。遺伝子操作された大量の食物、虫も食わない野菜。決して病気にならない産まれて2，3カ月ですぐに食べられる、おいしい豚や牛や鳥の肉。魚だって抗生剤入りのえさで育てられていたので安全かどうかわかったものではありません。広い広大な海も一見綺麗ですが海底のさんごは死滅し、深海魚という生息できるはずのない

魚類ばかり、食べられない魚ばかりがわがもの顔で泳ぐ海・・。食べられるものは何もありません。魚は清潔な工場で薬で生まれて薬で管理されて出荷されるものなのです。野菜もまたしかり。衛生的な野菜ばかりです。

数１０年間続いた異常気象が世の中の食生活をも変えたようです。ベランダやバルコニーで作る趣味の野菜作りが一番高級な趣味と言われる世の中です。

私達人間はこのありえない現象の渦に巻き込まれあるものは絶望、あるものは自暴自棄。もうめちゃくちゃです。家庭菜園の野菜が一番安全な食物ということで今まで大事に育てていた野菜が盗まれたりしていました。お金の価値は暴落し、みんな何を信じて良いのかわからなかったのです。動けるものの一部はあちこちで暴動をおこしました。動けないもので家族もないものはあの時の大暴動でずいぶん死んだのではないでしょうか。私の家族は幸いといったら変な言い方ですが父親と小さな赤ちゃんだった弟だけが命を落とし後のものは命は助かったのです。父と弟は即死に近い状態だったのでまだしも苦しまずにすんでよかったと思っています。私もまた視力だけで助かったのです。

祖父は政府が管理する病院の医師でもありましたから毎日そこの研究機関に出て原因究明の指揮にあたっていたようです。でもどんなに原因をさぐっても糸口がつかめない、これはもう神の怒りとしかいいようがない、と祖母に愚痴をいっていたのを覚えております。

幼かった私も目をつむって「神の怒り」とはなにかと祖父に聞きました。祖父は私の目をそうっと撫ぜて「大いなる自然や大いなる神に感謝しない人間」への神の怒りがあって、私達の世代がそのつけを払わないといけなくなったのさと言いました。その時の会話と祖父の口調はよく覚えています。悲しそうでもなく運命でもあるという淡々とした口調でした。祖父は左足の切断だけですんだことを

喜んでいました。義足に慣れるまでは多少の苦労はあったかもしれませんが頭の機能がこわれず、人に迷惑をかけないですむことを喜んでいました。

「たとえ私の頭が壊れて植物人間になったとしても、私の家族は私を見てくれるし、友人だって友人をやめないだろうとわかっている。私は幸運な人間なのだ。少しでも原因を究明せよとの神の指図かもな。だがこれはゲームではない。この地球で人類が生き延びていくための自然に対する知恵比べだ。人類はこの知恵比べに自分さえよければいい、と大自然の知恵に逆らい遺伝子を操作し自然の恵みの食物さえ食物連鎖をおきてを長年無視してやぶってきた。そのつけがやってきたのさ」

「誰が悪いのでもない、というだろうか」

このごにおよんでもまだどこかのテロだ、というやつがまだいる。このごにおよんでも戦争をしたがるやつらがいる。今、こんなことをいっている場合ではないのに、どこかの器官を破壊させるべく、無力な政府を転覆すべきだというやつがいる。政府転覆してどうする？誰が統治する？諸外国も同じような状況で情報もままならぬ。PCもメンテナンスがきちんとできる人間が激減したせいかちゃんとつながらないことも多い。一体なにをどうしたいのか。我々人類は内輪もめしている場合ではない。

これからどう生きるか、が課題になる。自分のことばかり考えていては生きていけない世の中にもうすでになっているというのに、それを全く考えていない人間が多すぎる。

政治家は果たして無能か？いや、金の亡者もいるにはいるが現時点でお金がいくらあったもむなしいだけの世の中ではないか。今内閣にとどまっているのは責任感だけで政治をしていく政治家ばかりだ。国民が政治家を信じなくて一体どうやってこの世を維持していくのか。よく考えないといけない。

この奇妙な病気のせいで政府の財源である税金は半減どころかそれ以下になる。試算ではもうめちゃくちゃだ。一体だれがどうやってこの現象の原因を追及してこの奇病をなおすのだ。以前のように産業を復活させるために、また人類が生きていくためにどうやっていくのか。正に正念場。一番大事なところなのに。

祖父は政府機関に臨床を代表して現在判明しうる奇病の分析並びに原因を発表しました。政府の正式見解とやらがバッドミラクルが流布されてから実に5年目。遅すぎます。だけど昔から政府ってこんなものと祖母は言っていました。私は祖母からこの話を聞きました。まだ幼かったけれど私は小さいなりに神の怒りと奇病の関連付けと祖父の仕事の使命はよく理解していたつもりです。

以下は当時の政府が出したバッドミラクルの正式見解です。

」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
」」」」」」」」」」」」

広範囲、世界規模で拡散中の病気は日本政府ではすでに外国での呼び名が定着している「バッドミラクル」と名付けそれを正式名称とする。

・バッドミラクルは伝染病ではない。
・バッドミラクルは一過性だが失った器官もしくは機能は元に戻らない不可逆性のものである。
・バッドミラクルは一度罹患したら2度とかからない。
・バッドミラクルの原因や発症起因は現時点では全くの不明。
・バッドミラクルの予防方法はない。
・バッドミラクルでの日本国民の罹患率は現時点では実に８０％。
・これに男女差や地域差、並びに年齢差はない。ましてや病歴による差もない。
・バッドミラクルは収拾に向かっていて新たな発病率は下降に向かっている。

・バッドミラクルにこれ以上の統計はとれず、また治療指針も提示できない。
なぜならば日本政府並びに各国の政府は現時点では医療機関をはじめ各方面の機関が正常に機能しておらず研究者が皆無の状態だからである。国民は等しく、互いを思いやりこの異常事態に立ち向かうことをのぞむ。

以上がおおまかな趣旨だったと思います。そしてうろおぼえでしたが祖父からは急死が２０％。何らかの臓器をなくしたため苦しんだ人も多かったらしいです。そんなこんなで死亡率は４０％。祖父母のように何らかの四肢をなくしただけですんだ人が４０％。まったく身体には異常が出なかった幸運な人が２０％。今世の中を動かしている人は大半がこういう人だと。
「人間が減った。生き残っているのは、不具者ばかりだよ・・・異常だ。かろうじて何もなかった人は伝染病と信じ込んでいる人も多いので町には出てこない。病人を見かけると避けるしね。健常な人たちには手伝ってほしいことが山ほどあるが彼らも怖いのだろう。呼びかけには全く応じず、どこかでコミュニティを作って集まっていると聞いた。世の中はもうばらばらでめちゃくちゃだよ。これだけのことがわずか5年でおきたのだ。世界は終わりかもしれない」

祖父は疲れ切った様子で言っていたことを今も覚えています。
またこうもいってました。バッドミラクルは健康な組織には何ら損傷はないし、遺伝子解析にも悪いことろは1つもなかった。ただ二度と動かない組織を解剖してみるとそれも損傷はなし。そこが不思議な点だ。また一度罹患して身体の機能の一部が損傷したら二度とかからない。ここらあたりに病気の原因を解明する鍵があるのではないか、と。
事実祖父は公的な機関に所属する医師でありましたし、研究者とも政治家とも話ができる立場だった。またこのバッドミラクルを解

明する責任者の一人だった。当時はまだ発症が公になったばかりで混乱していたがもしかして祖父はすでに原因を漠然とですが把握していたのではないかと思います・・・。

５年前にかわいい小さな弟が亡くなってからも父親が突然死してからも私たち家族は生きていました。私は目が見えなくなってからも大丈夫、生きていました。耳も聞こえるししゃべることもできます。母親牧師でもありましたから信仰の力でうちひしがれたひと達を救いたい、救おうとして日夜飛び回っていました。だけど自暴自棄になった人は非常に多かった。

また世の中は非常に替わったのです。お金の値打ちなんかなくなってしまった。一番強いものは健康で身体が何の苦労もなく動く人たちです。そして食べ物を持つ人たちです。しかも食べ物を作っている人たちが最強でした。コミュニティにいる一部の人が暴動を起こして食べ物を作る工場を占拠したといううわさが広がりました。広大な農場や牧場も掌握したと。

その人たちはバッドミラクルに罹患していないグループということで自らを「グッド」と称していました。一体何が「グッド」なんでしょうか。確かにバッドミラクルに罹患していないことは幸運なことです。ですがそれで優越感を抱くというのはあんまりです。たまたま身体的には健康ではあるもののだからといって、よくない人間がよくないことをしてもいいのでしょうか。

そしてあの事件が起こり家族は離れ離れになってしまいました。結局家族で生き残ったのは祖父そして私だけでした。当時の私は１０歳。以後は強運としかいいようがありません。・・・この話はまだ続きます。読んでくれるならありがとう、です。

第5話・祖父と黒井の主張

グッドがますます勢力を増してきました。昔で言うカルトがかかっていると祖母が言っていました。

グッドはバッドミラクルに罹患しない、健康そのものの人間でしか入会できない組織らしいのです。すでに会員は2万人ぐらいいるそうです。バッドミラクルがこんなに蔓延していてもかからない、ということは優秀で強力な遺伝子を持ち、これを後世に伝えようとするグループらしいです。代表は誰かわからないらしいです。

祖父はグッドの勢力を甘く見ず心配していました。すでに自衛隊と言う兵力を持つ者の中にもグッドの崇拝者が多く、自衛隊を脱会して入会したものも多いと聞いていました。

グッドが植物工場や魚工場を占拠したというわさは本当でした。お金の価値は暴落してはいるものの、金や宝石はまだ流通しています。もしかしたらお金よりも大きな価値があったと思います。

でもそれよりも、もっと大きな価値を見出したものが・・。

それは知能でした。バッドミラクルに罹患して身体の機能を損傷したとしても現役で活躍しているものをグッドが勧誘しているらしいのです。

グッドは食物を掌握していてどうかすると政府よりも強い権力を持ちつつありました。知能を活躍させるもの・・・曰く、医師、各方面の研究者、特に理系の研究者をグッドの準会員どころか役員そして食物に不自由はさせないという条件でグッドへの加入をすすめるのです。

祖父にもその勧誘が来たらしいです。祖父はバッドミラクルに罹患して片足を義足にしているので本来ならグッドには入れないはずですが彼らは祖父の頭脳と医師としての知識、バッドミラクルの原因追求の研究者を手に入れたがっていました。

祖父は家族がたとえ飢えようともこれは政府がなんとかしないといけない事態だ。バッドミラクルの研究は確かにすすんではいない。だが優秀な遺伝子をもつものがバッドミラクルに罹患しないとか、優越感をもって選抜意識をもつのは間違いだと私は絶対にグッドには行かない、と応酬したらしいです。

ただグッドの勢力は政府としてはもう無視できない団体でかつ脅威となっていました。世界中にいるバッドミラクルに罹患しない健康な人間が大勢グッドに入会しています。本部は日本にありかつ代表者も日本人と言うのはわかっていたらしいです。

ただグッドに入会してもなお、バッドミラクルにかかってしまった人間はグッドを去らねばならない、そういう決まりがあるらしく事態はややこしいことになりました。それでバッドミラクルに罹患したものではあってもグッドに今度も貢献できそうな人間は生かしておくこと、かつバッドミラクルにすでに罹患しており、本来ならば入会もできないがグッド側が選抜した者に限り入会を許し、グッド内で政府とは別にバッドミラクルの撲滅を研究しろ、ということらしいです。

祖父は怒っていました。祖父は医師であり研究者であり、政府側の人間です。グッドは確かに強大な組織ではあるがバッドミラクルは伝染病ではないし選抜意識の強いカルトな団体が何というと怒っていました。祖父は食べ物を作る大規模な食物工場や農場、水場をかってにおさえたことに怒っていました。

バッドミラクルにかかって不具者にかかったり、病人になってしまったものを助けこそすれ、排除すべきという考えをもつカルトなグッドは滅ぶべきだと怒っていました。

ですが大声ではもう言えないくらいグッドの組織は強大になっていました。

私が１１歳の誕生日を迎えたその日。

珍しく祖父が早く帰宅し、母も祖母もいて私のお祝いをしようといってきました。もうなかなか手に入らない小麦粉や高価なバターや卵を用意してくれてケーキを作ってくれました。一緒に私ももちろん粉を混ぜ、ケーキの焼くにおいにわくわくしその飾り付けも手伝いました。イチゴやミカンも缶づめでしたが用意されていました。私は子供だったけれど食料は大昔で言う戦争中の配給切符のようになっていて、ひとりひとりの食料品が政府から配られるようになっていました。まだここが日本だったからよかったでのです。他の国はもっと悲惨な状況にあり、渡航禁止の国も多くあったようです。ただ誕生日だからと言ってこれだけの卵やケーキを作れるだけのバターや生クリームを用意できる家はざらになく、我が家はぜいたくが許されるというか、そういう特権があった家だとは今はわかります。

その夜、ステーキも用意され祖父にはワイン、祖母と母にはシャンパン、私はアップルジュースが用意されて楽しく食事していました。食事の後ピアノや祖父のヴァイオリンを聞いてゆっくりと過ごしていました。忘れもしません。玄関のベルがなりました。時刻はもう9時だったと思います。

「どなたかしら、」祖母が出ました。「まあーっ」玄関のカギを開けるなり祖母のうれしそうな声がしました。

「今日は麻利亜の誕生日なのよ。あの子も喜ぶわー」

来客は黒井さんでした。5年いいえ、6年ぶりだったと思います。私も覚えていました。祖父が立った気配がします。ですが祖父は黒井さんに何も話しかけませんでした。そのときすでに祖父は黒井さんが何をしているのかわかっていたと思います。その時以降の母と祖母の反応は覚えていません。

「こんばんは、みなさん。黒井です、今私はグッドにいます・・・」

祖父の声がしました。

「うん、うわさは聞いていた。グッドにいるのは本当だったのか」

「グッドは先生が言うほど悪い組織ではないですよ。むしろ後手後手にまわっている現行の政府の方よりはましではないかと思いますよ。今やグッドは政治経済関連も牛耳っていますしね。世界は代わって行きます。先生・・、手伝っていただけないかと最後のお願いをしに来たのです」

黒井さんの声が私に向き直りました。

「麻利亜ちゃん・・大きくなったなあ、眼のことは残念だったね。でも綺麗になったね。ぼくはまた会えてうれしいよ・・。ぼくはグッドにいる。君のおじいちゃんたちと一緒にグッドで楽しく暮らさないかと、そう思って誘いに来たんだよ」

まだ私は１１歳になったばかりです。当然混乱しました。

「黒井さん、おじいちゃんはグッドは良くないところだって言ってたわ。私はどこにも行かないわ」

「規関先生、孫にまでそんなことを言ってるのですか、あいかわらず頑固だなあ。でも、グッドに一緒に行って私と一緒にバッドミラクルの研究を続けませんか？先生の今までの業績からしてグッドには必要な頭脳だと判断してお誘いに伺ったのですよ。どうか私と一緒に行くといってください」

「断る。黒井くん、残念だ、君がそのような機関にかかわるとは誠に残念に思う」

「グッドは別に悪い機関でもないですよ。そりゃ政府にとっては脅威にあたるからそう流布しているだけでグッドには罪はないでしょうが、政府の批判はそりゃしてますが、別に政府にとってかわろうとしるわけでもなし、バッドミラクルに罹患した人間を差別して役立たずは殺してしまうとは一部本当ですが一部はうそですよ、先生この点も含めて本部でゆっくり語り合おうではありませんか。私は先生を尊敬しています。どうか一緒に来てください」

「何度も言うが断る」

「最後の説得に伺いました。家にまで来たのは悪いとは思いますがざっくらばんな話はここでしかできないと思いまして」

「グッドはバッドミラクルに罹患していないことが入会の第一条件で罹患した患者を差別する組織だ。またバッドミラクルに罹患し働く場所もなくなって困っている人をも放置し、死にいたらしめようとしている。国の食料工場をも占拠してグッドの組織優先で配給をしている。まるで昔のドイツのナチではないか。アウシュビッツがないだけましというしかない！」

「先生、グッドは差別組織でもなんでもないですよ。優秀な遺伝子を残そうとして生き残ろうとして何が悪いのですか・・・我々グッドが暫定政府として諸外国にも認められる日は近い、事実もうそこまで来ています。我々は食料品の供給もすでに掌握している。外国勢の一部を相手にすでに高値で輸出の準備もある。生野菜類や魚類の作りだしや工場はもうおさえていますのでね、当然でしょう」

「高値、輸出・・グッドは何を考えているのだ。自国の供給だってもう自給できてうない段階で！飢えている人だっているんだぞ」

「飢えている人もいる・・・この食卓の満ちたりようはすごいですね。先生の家ではいつもこういう食卓ですか。あ、このケーキ、麻利亜ちゃんへと書いている。そうだった・・・、今日が麻利亜ちゃんの誕生日だったね。ごめんよ、麻利亜ちゃん」

私は思わず言いました。

「黒井さんはおじいちゃんに会いにきたのではなくていじめにきたの？私達いつもこういう食事ではないわ。バルコニーで作っているお野菜も盗まれたりするので家の中に土を持ち込んで作っているの。なんでも高くなって買えなくなって、スーパーも食料が置いてなくてつぶれたり、みんなこうしているわ。お菓子も何にも今はないのよ。グッドのせいなんでしょ。どうして黒井さんはグッドの味方なの？」

「グッドのせいじゃない、バッドミラクルのせいだ。間違えないで・・麻利亜ちゃん・・時代の流れだよ、仕方ないんだ。

だけど君のおじいちゃんには世話になっているし、その研究姿勢も業績も尊敬している。左足をバッドミラクルに侵され義足になっ

てもなお、人々のために地道な臨床の現場にも顔を出し、研究もしている。グッドにはぜひ欲しい人材なんだ。だから麻利亜ちゃんからもおじいちゃんに言ってほしい。おじいちゃんがグッドにいけば君たち家族だって悪いようにはならないしね」
　おじいちゃんが叫びました。
「グッドの黒井医師・・・言われていたのは本当だったらしいな。さあ、私はもう答えたぞ、帰れ！」
「先生・・昨夜遅く首相が投降しました・・」
「なにっ・・！なんだって！」
「だから私がきたんです。先生、ぼくと一緒にきてください。一緒にバッドミラクルを撲滅してよりよい社会をたてなおしましょう」
「バッドミラクルに罹患してすでに瀕死の状況にある患者は身捨てられない。合法的や超法規的な臓器移植の話もすすんでいる」
「うん、聞いています。先生の仲間も何人かバッドミラクルにかかって急死もしましたが、何人かは先生のように命に別条ない器官を失うだけですみましたしね、でも超法規的臓器移植ってなんですかね。牛や豚や人工授精した赤ん坊でも使うのですか？たくさんの免疫抑制剤を患者に使って？それで一体何人助かるのですか？その優先順位は？どうせ１０年ももたない老人は放っておいてもういいと思いますよ。殺してやるのが本人や社会のため・・」
「黒井っこの最低野郎。帰れっ」
「その先生の頑固さがいいね、でもすみません。どうしても欲しい人材なので、まず人質として麻利亜さんをいただきます」
　黒井さんが私を抱きかかえました。そして何か堅いものを私の首にあてました。それからちくっと何か刺されて、注射針だったのでしょう・・・。私はぼうっとなってしまいました。
「黒井、なんということをする、この卑怯者！」
　ここからはあまり覚えていません。黒井さんの何かの合図で誰か見知らぬ人がたくさん家に入ってきました。土足のままあがったようでどたどたという音で騒がしくなりました。そして銃声が聞こえ、

ママの悲鳴があがりました。私は意識を失いました。

第6話・グッドの中で

どのくらい私は眠っていたのか・・・

目がさめると私はどこかのベッドの中にいました。誰かが私のそばに駆け寄り、「起きた？気分はどう？」と聞きました。それは女の人の声で多分看護師さんだと思います。部屋の中は暖かでした。私は起き上がろうとしました。すると頭痛がして頭がずーんとする感じです。腕には何かがつけられていて私は振り払おうとしました。

「あっ、だめよ。点滴がついているの。点滴ってわかるかな？栄養のある注射を今しているからね」

私は言いました。

「ここはどこ？おじいちゃんとおばあちゃん、ママはどこ？」

看護師さんが言いました。

「今、人を呼んだから・・・。今後のことはその人に聞いてね」

「あなたは、誰？」

「私は・・余計なことをいう立場にないの」

「ここは・・・どこ」

「・・・・」

看護師さんはどこかへ行ってしまいました。ドアが閉められる音がしました。1人にされたのかしら・・と思ってパニックになりかけたら誰かが入れ替わりに入ってきました。

「麻利亜ちゃん、起きたって？」

黒井さんの声でした。とたんに私は何もかも思い出して叫びました。

「黒井さん、こわい！ここはどこなの、私の家に返して！おじいちゃんたちはどこにいるの。おじいちゃん、おばあちゃん、ママはどこ？あああーーーん」

「落ち着いて、麻利亜ちゃん・・・」

黒井さんがベッドのところに来ました。
「このヘンなひもをはずして、こわい、こわいあああーーーんん」
「麻利亜ちゃんあぶないから、わかったわかった、点滴を今とるから、動かないで、大丈夫だから」
私はじっとしていました。何か丸いものがうでからはずされ、何かがちくりとして何かが抜き取られたのがわかりました。私は何かパジャマのようなものに着替えさせられていました。
「ちょっとは気分が楽になればいいのだが、」
「黒井さん、ここはどこ？私、家に帰りたい」
「うん、そのことで話がある・・・ぼくはせっかくの誕生日のパーティーをだいなしにしてしまったね。悪かったよ。かわりといっては何だけどしばらくここにいて遊んで行かないか」
私はもう１１歳になりました。だからそんな甘い言葉に騙されません。第一おじいちゃんが言っていました。君がグッドに入っていたのは知っていただがわしは賛同はしないし、ましてや協力もしない。要請は断る、と。黒井さんはグッドと言う悪い組織に入ったのです。おじいちゃんはどうなってしまったのでしょうか。
私は目が見えません。不安と恐怖でずっとしくしくと泣いていました。
「麻利亜ちゃん、大丈夫だから」
黒井さんがベッドの隣に腰かけたのでしょう。私の隣がへこんだ感触がします。そして黒井さんのよく吸っていた懐かしいタバコの匂いが少しだけしました。だけど、黒井さんはもうおじいさんの友達でもなんでもないのです。あの時はおじいちゃんを迎えにきたといってましたがおじいちゃんは断っていました。私は人質にされていたのです。それぐらいはわかりました。
「おじいちゃんはどうなったの？私のおばあちゃん、ママは？家はどうなったの。ここは黒井さんの家でもないでしょう。・・グッドの中なの」
「う、ん。麻利亜ちゃん少し前は本当に赤ちゃんみたいだったのに、

大きくなったねえ・・・でも心配はいらないよ。おじいちゃんはちゃんと生きて元気でいるよ。ここはぼくの病院だ。ぼくは確かにグッドにいる。ただグッドの管理している病院にいるんだ。ぼくはここの病院をまかせられているんだ。ぼくが病院長なんだよ。・・・ここには研究所もあってね、バッドミラクルを治すべくぼくも研究しているところなんだ。おじいちゃんと一緒にね、研究したくて今も説得中なんだ。おじいちゃんの決心がつくまで麻利亜ちゃん、きみはここにいてくれていいからね」

「おじいちゃんに会わせて、それとおばあちゃんとママにも」

「もちろんだよ。ただきみはあんまりびっくりしすぎて気を失ったのだ。だからもう少しここで入院してね。ここはいいところだから、心配しなくていいから」

私は騙されませんでした。本能的に何かかくされている。何か言いくるめられようとしていると感じたのです。私はもう11歳。騙されません。

「おじいちゃんに今すぐ会いたい」

「・・・うん、おじいちゃんはね、あのあと気分が悪くなって別の部屋に入院してもらっている。でも大丈夫だから」

「今、会わせて！」

黒井さんは私の扱いに困っていたようでした。今から思えば黒井さんはいくらでも荒っぽい処置をしようとしたらできた立場です。やはり黒井さんは優しい人でおじいちゃんとは別の立つ場でバッドミラクルの解明に力を注いていたのだと思います。でも当時の私にそんなこと理解できません。私はもう不安感でいっぱいでした。

「麻利亜ちゃん・・わかったよ」

でもその前に会ってほしい人がいるんだ。しばらくここにいてほしいので一緒に暮らしてくれる人だよ」

「えっ、いやよ。私は家に帰りたいのよ！」

「ここにいるほうがいいと思うよ」

黒井さんの声は静かでした。

「家がいいっ！」
「じゃあ、はっきりいおうか。どうせわかることだし。麻利亜ちゃん」
黒井さんの声はもっと静かにささやくようになりました。
「・・・君の家はもうないんだよ」
「・・・・・」
「君のおばあちゃんとママは死んだ。君の家はもうない。原因は・・・あきらかにぼくでね、悪いとは思う。おじいちゃんは生きている。もう少ししたら会わせてあげる。君はこれからグッドの中で暮らす。ぼくはいいように取り計らう。きみは安心してここで暮らしていけばいい」

第7話・シスターアンリ登場

私は黒井さんがいなくなってからもずっと泣いていました。
私は目が見えません。私が置かれたベッドのシーツの中で身を小さくしていつまでも泣いていました。
おばあちゃんやママが死んだなんてうそ。黒井さんがこんなにいじわるで残酷なひとだとは知らなかった。ここがグッドの中というのもうそ。これからここで暮らすというのもうそ。おじいちゃん、おじいちゃんに会いたい！おばあちゃん、おばあちゃん。おかあさん、おかあさん・・・。
　みんな助けて、何も見えない。私はどこにいるの？誰か私を助けて・・元の場所に戻して。
　私は自分が小さく小さくなっていくようでした。このまま消えていってしまってもいいぐらい小さくなっていつまでも泣いていました。
　そして泣きながら眠ってしまったのだと思います。

　私は夢をみていたと思います。でもいきなりぱちっと目があきました。夢はどこかへ行ってしまいました。私はシーツをはねのけ、ここはどこかを思い出しました。
　この部屋は相当に明るいらしく上を見上げるとぼんやりとした光源が見えました。どこからか風が入ってきています。部屋は暑くもなく寒くもありません。そして誰かがいて「麻利亜さん、気がつきましたか？」と尋ねました。その声は女性の声ですが落ち着いていて低く何か私を安心させるものがありました。私は警戒しながらも聞きました。
「ここは、どこ・・・ですか」
うすぼんやりとした女性の姿が近づきました。なので私は身を堅くしました。その姿はぴたりと止まりました。そして再びあの落ち着

いた甘いような声がしました。
「私はシスターアンリ。アンリと呼んでください。しばらく麻利亜さん、あなたと一緒にこの部屋で暮らします。よろしくね」
シスター・・、シスターアンリ。
シスターと名乗るならばその人はクリスチャンだ。私やお父さんお母さん、そしておじいちゃんもおばあちゃんもクリスチャンだ。目が見えていたころにシスターと名乗る人とも何人か会ったことがある。クリスマス礼拝や復活祭、いろいろなイベントでも会ったことがある。またよその教会でも会ったことがある。たいてい長い裾を引きずり、頭にベールをかぶっていた。でもシスターアンリと名乗る人は私は知らないし、聞いたこともない名前だった。
その人は敵なのか味方なのか。ここグッドの中なのか、それとも違うのか。彼女は黒井さんの何なのか、黒井さんに頼まれてやってきたのか。いろいろなことが心の中で渦を巻き、私は黙り込んでしまいました。
「麻利亜さん、ココア入れたけど、飲む？私は飲むけど・・・」
シスター・アンリの声は静かでした。そしてなぜか計算高くもなく声は平静で。私の警戒心を解く何かがありました。そしてまだ１１歳になったばかりの私に対してのこのていないな言葉遣い。
「時間はたっぷりあるの。だから、飲まない？」
「うん・・・、じゃあのむ」
ココアを飲むのは本当に久々でした。なんでも物価が高くなってからはココアやコーヒー、ジュースはあまり飲ませてもらえませんでした。こんなに甘くてとろりとしたココアを飲むのは生まれて初めてでした。こんなにおいしい暖かいのみものは生まれて初めて飲んだと思いました。一時はおじいちゃんのことを忘れてしまうぐらい。不安で押しつぶされそうな心を少しは慰められたと思います。その位甘くておいしいココアでした。
だまって一生懸命飲む様子をシスターはにこにこしておられたと思います。

「おかわり、どうかしら、」
「・・・・」
「私、おいしかったからおかわりするけど、麻利亜さんもどうかしら」
「じゃあ、飲む」
「コップをこちらに渡してね」
「うん、これ」
今から思えば私は家庭から出たことのない、そして幼稚園には行った経験はあっても視力がなくなってからはちゃんとした教育を受けてはいません。点字、は少しはわかります。学習・・昔小学校であったころの勉強なら両親が使っていた昔の教科書でおばあちゃんが教えてくれていました。でも外の人々には世の中がバッドミラクルに侵され不安定に物騒になってからは出たりしていません。ちゃんとした対応ができなくて当たり前だと思います。でもシスターアンリはそんなことは私に思わせませんでした。
そして彼女とは今の職場に流されていくまでに実に１０年もの長い間私と生活を共にしていくのです。

第8話・シスターアンリの顔

結局私は黒井さんとシスターアンリの思惑通りになってしまったのです。でも私には何ができたでしょうか。盲目で家もなく、孤児になってしまった私に。結局おじいちゃんにあわせてもらえるのはずっと後のことでした。

シスターアンリは私にこういいました。

「おじいちゃんはちょっと病気になって黒井さんのいる病院に入院しているの。もう少したったら一緒にお見舞いに行きましょうね」

繰り返しますが私に一体何ができたでしょう。何も見えない私に。誰が何をしようと何をされようと私は抵抗も何もできない無力な少女に。

グッド側からの接触・・・。祖父規関博士の接触に黒井さんが出てきたのは本当に幸運なことだったのです。私にとっても祖父にとっても。

シスターアンリは私が心を許すまであくまでしゃばらず、押しつけがましくもなく、ただよりそっているだけでした。誰かがそばにいる、これは私の家族ではないけれど、女の人だし、声はやさしいし・・それに「しかたがない」し・・・。

私が不安とさみしさで泣きだすと、そっとよりそってくれました。私がそれを嫌がるとまたそっと離れています。でも見守られている意識はずっとありました。今から思えばそれも彼女の計略だったかもしれません。彼女はクリスチャンの中でも私が育った教派と違いずっと戒律の厳しい所の修道女でもありましたが、心理学の博士号ももっていたのです。彼女はグッドの中でも黒井さんとともに心理的な戦略の重要な一端を担っていました。これもずっと後になって私が大人になってわかったことです。

シスターアンリ。なぜ、彼女はそうだったのか。１０年間彼女

はグッドの仕事をしながらも私と寝起きをともにしたのです。しかも最初の2，3カ月は寝起きどころか食事もお風呂も全部私と生活を共にしました。おりおりに私に勉強させ知恵もつけてくれました。ほっておこうとしたらそれができたはずでした。幼いまま私を閉じ込めて囚人にもできたのです。なぜ、彼女はそうしたのか。なぜ、黒井さんはそうしたのか。

2，3日もたつと私は観念しておじいちゃんのご病気がよくなったらお見舞いに連れて行ってあげるという言葉を信じることにしました。だってそれしか道がありませんでしたもの。それで食事や飲み物。日常のこまごまとしたこともグッドのシスターアンリの世話になることにしたのです。

ここはお部屋の一室で広くて快適でした。窓はありませんでした。どうもここは建物の最上階で窓はない、というよりも天窓になっているらしいです。壁に窓の開閉ができる装置があって風を入れたいときにリモコンなどで操作できました。

一度なんかシスターアンリがいないときに手探りでものを探し、たまたま触ったのがその装置だったことがありました。そのリモコン操作した時にいきなり雨が降ってきて身体が濡れびっくりしたこともあります。すぐに閉めましたがその時すぐに自分でタオルを探して身体を拭いたりしたにもかかわらずすぐに誰かがきて「大丈夫ですか」と聞かれ、タオルで拭かれたので私はやっぱり監視されているのか、とも思いました。

私は当然ながら世話になっていても、シスターアンリにはなかなか心を許すことができませんでした。私は口を聞かなくてもシスターアンリは料理の味付けの感想を求めたり普通に接していました。私は自分から口を聞くのは「おじいちゃんに会えるのはいつ？」という言葉だけです。でもシスターアンリは「私にもわからない」というばかりでした。

何度も聞くとシスターアンリは困ってしまうようでした。それで私もむっつりと黙りこみます。部屋に2人だけでいてどうかすると1日の大半を無言でいることが多かったです。もっとも私はまだ子供なので何もすることはありませんでしたがシスターアンリの方はもう大人だったので何か机に座って仕事をしている様子でした。

祖父が昔持っていたのでわかりますが、シスターアンリも小さな手のひらにおさまるパソコンをもっていてよく操作する音が耳につきます。どうかすると1日中音がします。プリンターを動かす音もします。

私はうんざりしていました。そして元の家庭に戻りたい。編みかけのセーターや刺繍の続きをしたい。点字の絵本を読みたいとどれほど思ったでしょうか。でも何も言えないし、ただおじいちゃんの安否を気遣うだけでした。

シスターアンリはある日外部からのベルで誰かと長い間話をしていました。そのあと私のそばにきて言いました。

「私は明日から出張になります。麻利亜さんともっと仲良くしたかったけれど、無理はないわね。明日から誰か他の人が世話をしにきますので仲良くね」

私は驚きました。そして困りもしました。だって殆ど口を利かないとはいえ、シスターアンリのやり方や心遣いに感謝しつつあったからです。

「ええっ、困るわ」

思わずこう言ってしまいました。シスターアンリは驚きまた喜んだようです。彼女は私のそばにやってきて座りました。いつもなら拒否しますが、私はそのままにしていました。シスターアンリは私の手を握りました。やわらかい暖かいそして指が長い手でした。それからシスターアンリがこういいました。

「麻利亜さん、いい機会だから私の話を聞いてくれるかしら。私の話になるけれど、」

私は手を握られたままうなづきました。シスターアンリは私の手

を握ったまま自分の顔に持って行ったようです。というのは彼女がこういったからです。
「麻利亜さん。本は点字で読めるけれど、人の顔はさわらないと覚えられないでしょう。私の顔にさわってくれないかしら」
私が返事をするよりも先に手がシスターアンリの顔の部分に持っていかれていました。私はその手の感触に思わず絶句しました。なぜならその感触は人間の皮膚ではなかったからです。つるつるでどう触ってもプラスチックのようなペコペコしたヘンな手触りでした。それは頬から上の顔の部分です。
頬から下は普通の人間の顔です。やわらかな唇に触れたときは私はなんとなくほっとしました。
「今ベールをはずすから髪もさわってみてね」
シスターアンリの髪は長くさらさらでした。とても良い手触りでした。髪はそうっとのばすと私のひじぐらいまで延びました。かなり長いのだと私は思いました。
「髪は自慢なのよ。私が綺麗なのはそれくらいなの」
シスターアンリは小さい声でそう言ってふふっと笑いました。それからあっさりと付け加えました。
「ほっぺたやひたいは、バッドミラクルのせいよ」
私は何と言ってわからず黙り込みました。見えなくともシスターアンリの容貌のひどさというか、醜さがよくわかったのです。
「人工皮膚はよくできているけれどこれが限界みたい。ぱっとみにはわからなくとも私の皮膚はとても不自然で、私の目と鼻のラインにあっていないの。自家皮膚移植は何度もしたけれどどういうわけか拒否反応がすごくて何度やっても皮膚が落ちてしまうの。もうあきらめたけれどね・・・」
シスターアンリの声はとても静かでした。
「ねえ、麻利亜さん。バッドミラクルで苦しい思いをしたのはみんななのよ。あなただけではないわ。それはわかるわね。グッドにいる人たちも、みんなバッドミラクルにかかわっている。グッドにい

るからってバッドミラクルにかからない保証はどこにもないもの。私は両親がバッドミラクルに罹患して死んだし残った兄2人と私とでグッドに入ったの。グッドに入ってからバッドミラクルに罹患してこんなふうになってしまった。よりよって顔、だなんて一体なぜ？内臓や手足が使えなくなった方がましだ、と何度も思ったわ。女性にとって顔の容貌ほど大事なものはないもの」

「・・・・」

「麻利亜さん。私の兄は2人いるけど2人とも医師なの。そしてグッドに入ったの。最初の方はともかく今のグッドは悪い組織でもなんでもないわ。

もう一度言うわ。グッドは確かに最初はバッドミラクルにかかっていない人を最良の遺伝子をもっているとみなして最後まで生き残るというコンセプトで結成された秘密組織だったらしいわ。だけどこれだけ大多数の人がバッドミラクルにかかってしまったのよ。

麻利亜さんはまだ子供だし・・・それに、目が・・視力がやられてしまったので世の中が見えないからわからないかと思うけれど、そりゃあひどいものよ。

グッドには内部から誘いがあり、家族ぐるみで入会したの・・・。だけどみんなバッドミラクルにかかって死んでしまった・・・家族の中では私だけ生き残った・・・。グッドの組織自体も大荒れで世の中と同様に殺伐としている。生き残った私はどうすればよかったのだろう。

幸い私は大人だった。それと聖書をもっていた。ああ、イエス・キリストさま。私は彼に救いをもとめ、彼は我を救いたもう。

グッドの中では一部の人たちが聖書を研究していた。それも本格的に。

ヨハネの黙示録を。わかるね？ヨハネの黙示録は世の終わり、最後の審判を書かれた予言書と言われている。それを研究していた人たちがいたの。私は帰依したの。聖書がなかったら多分私はこの世に絶望して自殺していたでしょう。

麻利亜さん、でもバッドミラクルにかかってもなお、生き残るのがわれらの定め。どのような姿であれ命ある限り生き続けるのが我らの定めだと思う」

私はシスターアンリのいうことがよくわかりました。１１歳の子には難しいのではといわないでください。

シスターアンリと宗教の話をしたのははじめてですが私の家は教会でもあったので牧師たる私の両親もよく説教でこういう話をしていたのを思い出したのです。カソリックとプロテスタント。昔は宗派の違いがもっと厳格にあり宗教戦争もあったらしいですが私がこのような状態でかつシスターアンリもこういう事態でだとまったく関係ないことです。

シスターアンリは最初から最後までていねいで子供扱いせずきちんとした言葉遣いで私をさとしてくれました。そして自分も仕事があるから、でも朝と晩はこちらに帰ってくるから、いい子でいて、と頼んだのです。

私はこっくりとうなづきました。シスターアンリは私の手を握り、グッドの中にかぎらずこの世に生きて生き延びるためには勉強をしなさい。学問はお金に関係なく誰にも盗られることなく、また人や自分のために役立てることがあるから。私も力になるから、というのです。

シスターアンリは必死な様子でした。私はぼんやりとおじいちゃんのことを思い出していました。そしておじいちゃんに何かあったな、と思いました。

そう思うと私の目からなぜか涙が出てそれは止まりませんでした。そしてこういいました。

「シスターアンリ。わかったわ。私ここにいるわ・・。そして勉強するわ。私は目が見えないからわからないけれど、もう家には帰れないし、帰れるところもないのでしょ。おじいちゃんにも会えなくなったのでしょ」

シスターアンリは私を抱きました。

「ああ、麻利亜さん。すべては今は言えない。でも、あなたは生きている」

次の朝から、シスターアンリは朝ごはんを私と食べた後、どこかへ行き夕食時まで帰ってこないときが増えました。シスターアンリのいないときは、食事はどういうわけかどこからか来て運ばれてきます。基本的に食事を運ぶ人はいつもシスターアンリでしたが昼食時など不在の時はいろいろな人が運ばれてきました。

でも私に話しかける人は誰もいず、私も誰にも話しかけませんでした。だってここはグッドの中で私はグッドの人間ではなくおじいちゃんのためにたまたまいるのだ、と思っていたからです。

グッドの内部といっても当時の私にはどういうところかわからないのです。でもおじいちゃんが絶対にグッドを拒否するといっていたので私も拒否したのです。当然のことです。だっておじいちゃんがそういっていたもの。グッドは健康な人が多く選民意識が強く、実際に工場などを占拠し食を占領している悪い組織だと。

第9話・ヨハネの黙示録

このまま未完のまま終了いたします。
終末論を遺伝子医学と原子力とヨハネの黙示録をキーワードにして書くつもりでしたが想定上のことが平成２３年３月にありこの件については創作を断念いたします。
アップしてもほとんど見ていただく人がいなし、お気に入りもゼロ。なので未完のままにしても怒られることはないかと思いますが、内心は忸怩たる思いもあります。いつの日かもっと実力がつけば書きこなせることもあろうかと思います。
同時進行させていた「あたしのはなしをきいてくれるの」・・、もかなり重い話で本日をもって終了いたしました。（これは完結しています。）
今度はもっと明るくて気軽に読める話を書きますのでまた読んでください。
どうぞよろしくお願いいたします。

なお最後になりましたがこのたびの地震に津波、原子力関連の天災並びに人災にあわれた方々には言葉もありませんが東北は必ず復興します。貧者の一灯でしかありませんが朋の字からも大きな祈りを込めて金額は少ないですが募金させていただきました。
今なお救助を待たれているかつ救援物資を待たれている方々に早く助けが来ますように。
かつ勇気を持って災害救助の当たられている方々に応援のエールを送ります。また感謝いたしています。

平成２３年３月お彼岸にて

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3982q/

マザー・マリア（未完）

2011年4月26日03時40分発行